

ホトトギス

五月号

ホトトギス 昭和二十四年五月 二十一日出版 月刊誌 発行所 東京 日本郵政 第三〇七号
定額 昭和二十三年五月 一円 発行所 東京 日本郵政 第三〇七号
定額 昭和二十三年五月 一円 発行所 東京 日本郵政 第三〇七号



風雅の小筥（六十二）

廣太郎

丸ビルに嵌められていたドアのガラスは、移転先の東銀ビルにそのまま移す事が出来なかつた、という事は先月の話であつたが、そのドアは当然東銀ビルに移転する時には丸ビルに残して、その後はオーナーの三菱地所の方で処分されるという事を聞かされていた。残念ではあつたが、厳密には虚子が直接書いたものでは無く、東銀ビルも、所謂孫書きというのだからか、それでも虚子の筆跡が残ると、いうので、移転してから暫くはとんとこの事は忘れていた。ところが、丁度この平成八年は、十二月号が丁度一千二百号、創刊百年を迎える節目でもあり、その事も関係したとも風の噂で聞いたりもしたが、丸ビルで使われていたドアのガラス部分のみ御寄贈下さるといふ話が突然あり、ドア枠から外された虚子の筆跡で「ホトトギス社」と書かれたガラス部分のみホトトギス社に寄贈されたのである。

ガラスは縦九十六センチ、横七十六センチ程の縦長であつたが、このままでは何かの拍子に割れたりし兼ねないので、早速額装をする事になり、当時から懇意にさせて頂いていた横浜御在住のホトトギス同人橋本青草氏が、丁度額装等を専門とされており、氏にお願いしたところ快く引き曳けて下さり、立派な額に納められ、その後のホトトギス社の事務所では、まるで看板のように事務所に入って一番目立つ場所に掲げられるようになった。橋本青草氏はその後も御元気で、ホトトギス社の句会等欠かさず御出席されていたが、コロナ禍もあり最近御無沙汰である。御歳に触れると恐縮ながら令和五年で九十九歳になられるが、御元気だろうか。

旬日記 廣太郎

令和四年五月二日 野分会吾屋例会ハイブリッド

その奥に何か蠢く薪能

五月一日 青嵐会吾屋例会

邸の庭初夏の明るさ遠ざけて
若楓悼む心に彩られ
喪心を潤してゐる初夏の雨
初夏の風君の悌運び来る

五月五日 蕉心会

庭園の色の変幻夏来る
松落葉にも名園といふ気品
世の終り明日来さうに蟻走る
子供の日子供のやうな大人かな
蒼天をパステルに染め夏霞
初夏の音階奏で鳥語降る
屋形船卯浪を蹴つて夜の部へ

五月九日朝日 カルチャー若草句会

露を煮る厨に香り閉ぢ込めて
失恋の娘に露の苦みかな
天上の国へ麦秋色放つ

麦の秋遺されし者潤せり
松蟬に醒まされてゆく大地かな
松籟に乗り松蟬の奏で初む
麦秋に飛行機雲の突き刺さり

五月十日 大阪倶楽部

庭若葉留守の扉は閉ざされて
天上に魂を誘うて若葉風
笹粽故郷の香り解きゆく
母子句碑守るが如く谷若葉

五月十二日 土筆会

麦秋を拈げ孤高の讃岐富士
余花に会ふことも吉野の旅なれば
みちのくに余花を訪ねて偲ぶ人
摩天楼映し植田の鎮もれる
初鯉土佐の気風に耀られたる
麦秋の中に鴉の句読点

五月十三日 北國文芸選者吟

さはさはと暮れ残りたる麦の秋
五月十三日 工業倶楽部
母の日や母に見られてゐるやうな
卯浪寄すイージス艦の並ぶ波止

筍の山氣纏ひて掘り出され
筍の根を断ち切られたる叫び
母の日や悌悌ぶ人の黙
卯浪寄す鎮魂歌めく音奏で

五月十七日 きつらいぎ会

松蟬や震災句碑の主亡く
庭薄暑主亡きまま鎮もれる
松蟬や伝説多き松林
松蟬や天橋立見上げつつ
ここからは富士見えるてふ坂薄暑

五月十九日 前議員句会

青鷺の翻る時風を呼ぶ
漣を立てて薫風過ぎゆける
更衣して庭園の軽さかな

五月十九日 登高会

みよし野に栞る悌踊花
山女釣岩になり切る息遣ひ
斑点を歪め山女の釣り上る
精彩を放つ平幕五月場所
序破急の風は曲者踊花
山女釣山氣見極めたる漢

夏場所や谷町目立つ砂被り

五月二十日 廣邦会

卯浪寄す沖に魂さ迷うて
今日よりは高齢者てふ祭客
曇天を持ち上げてゐる祭笛

五月二十日 青嵐会東京例会選者吟

若楓館の一角引き締めて
松蟬や海岸線のある限り
松蟬に松膨らんでをりにけり
夜の帳踊子草の舞台かな
みよし野に魂を還して踊花

五月二十二日 野分会東京例会

薪能古都の靈氣を引き絞り
海亀の浜に未来を遺し逝く
小鼓に火色揺らめく薪能

五月二十四日 若水句会

八金の手捌き躍る初鯉
牡丹の大輪といふ孤独かな
牡丹の崩れ地に置く気品かな
墓薄暑夫の隣に納められ
軽暖に街並淡く彩られ

空映し高層ビルの窓薄暑

五月二十五日 目黒学園句会

街騒に色を足しゆく花水木
京なれや先づは筍飯所望
墓碑銘に影を広げて樟若葉
淡き香の立ちて筍飯盛られ
庭園の色のをや樟若葉

五月二十六日 倶楽部合同句会

梯を追うて薄暑の故郷へ
夏霧を盾に富嶽の消えゆける
海亀の消ゆ松籟に見送られ
主亡き庭の春秋樟落葉

雑詠 廣太郎 選

冬の日のかくも豊かに人包み 袋井 湖東紀子
 何しても心の隅にある師走 同
 街中が歌街中がクリスマス 同
 日本を紹介する子文化の日 テネシー 丸谷瑞理
 取つて置きたくなる色や落葉搔 同
 夫の手で解かれてゆく悴かむ手 同
 獣らの風を聴きみる柞山 渋川 木暮陶句郎
 落選の陶持ち帰る秋の風 同
 毬栗の落ちて榛名の土を噛む 同
 水鳥やきらめきを引き交はしては 龍ヶ崎 今橋眞理子
 影落とし影受けとめて枯木立 同
 初春や母となる娘をうち囲み 同
 その上を高く鳥ゆく枯木立 八千代 岡田順子
 片時雨夕日の街の欠けゆける 同
 五分ほど葱下げて聴く聖歌隊 同
 初暦見慣れし壁の改る京都 京都 山崎貴子
 口紅の淡きに慣れて初化粧 同
 奉納のワイン樽あり宮の春 同

冬ざるる去年はまだ家ありし跡 長岡 安原 葉
 勿体なき一人気儘の柚湯かな 同
 いたちとて罌にかかれば愛らしく 同
 冬紅葉山懐に一人居て 横浜 高浜礼子
 紅葉散るとき裏表うらおもて 同
 いつとなく森に還つてゆく落葉 同
 冬木の芽大きな明日を閉ぢ込めて 神戸 涌羅由美
 凍蝶に小さき日差のありにけり 同
 寒鯉の揺らぎ池の面目覚めけり 同
 淡路島まづは蹴り上げ寒稽古 同 藤井啓子
 初旅やワルツ奏でる駅ピアノ 同
 傾ぎたる松にも淑氣平田町 同
 顔見世や当日券で滑り込む 西宮 本郷桂子
 花道の役者の吐息冬灯 同
 南座の風の灯透かし枯柳 同
 駅で遭ひ書肆で又遭ふ片時雨 香川 湯川 雅
 悴かんで諦めきれぬものを抱き 同
 冬霞景閉込めて景むなる 同
 友情のごとくに立てる大冬木 熊本 岩岡中正
 大枯木より青空の下りて来る 同
 雑踏のかたはらに静かな聖樹 同
 セーターを着崩すためのダイエツト 東京 田丸千種
 とつくりのセーターに首伸ばされて 同
 セーターのわが体温に包まるる 同

雑詠句評(四月号より)

偲ばるる師や惜春の一番機 長岡 安原 葉

折に触れ、つる師への愛惜。空港に来れば、いつも早朝に伊丹を発ち羽田へ通っておられた汀子先生が思い出される。「今日何も彼もなにもかも春らしく」という瑞々しい句で本格的に俳壇デビューされた師。汀子先生という大いなる「春」はもう戻らない。「一番機」という未来へ向かう明るさもまた汀子先生のイメージそのものである。(千種)

この師は紛れなく稲畑汀子であろう。毎週金曜日、大阪国際空港からの一番機に乗って朝日俳壇の選に向かうのを常として、筆者も空港まで送った記憶がある。作者も御多忙で、飛行機での移動が多いのであろう。美しい情が見て取れる。(廣太郎)

冬の朝水てふしろがねの刃 神戸 藤井啓子

冬の水、しかも冬の朝の水は驚くほどに冷たい。手に刺さるよ

うな冷たさなのであろう。それを「しろがねの刃」と表現された。冷たく光る研ぎ澄まされた刃のような冬の水。冷たいけれど美しく輝く冬の水なのであろう。(しぐれ)

寒い時期の水仕事は結構苦痛だろう。最近では瞬間湯沸し器が多くのお家庭で使われていて、湯を使う事が出来るが、冬に使う水の冷たさは文字通り刃に切られたような痛さを感じる。冬の寒さがひしひしと伝わってくる。(廣太郎)

赤き手に白き息吹きかけてやり 京都 山崎貴子

「赤き手」と「白き息」のコントラストを利かせ、一つの場面を印象的に詠み上げた一句である。

しかも、無駄な言葉もない省略の一句であるため、何をしていた冷たさの塊みたいな「赤き手」になってしまったのかと、読み手を一気に想像の世界へと引き込んでくれる。一寸、物語めいた一句で、息を吹きかけてくれる人の愛情が自然と伝わってくる。

(しげ人)

寒い日に子供が外から帰ってきたような情景が見て取れる。霜焼けになりそうな子供の手なのだろう。そこに暖かい息を吹きかけて温めようとしているのだが、その息も寒さで白い息となっている。色のコントラストが美しい。(廣太郎)

露の世のピアノ我が師に届けんと 神戸 浦羅由美

先日の関西ホトトギス大会の汀子先生を語る会にて、作者は追悼のピアノを奏でられた。色々な思いがこみ上げてくるような切ない調べは「露の世」の音色と表現されたことで尚更情感が溢れてくるように感じる。帰天された師に向けて精一杯の追悼の音色を届けようという作者の唯々清らかな思いが込められた句となっていて胸に響く。(佳乃)

作者は令和四年十一月に行われた関西ホトトギス俳句大会の汀子の追悼の会で汀子に捧げるピアノ曲を演奏して下さった。作者の汀子に対する思い入れが、季題を通して切々と伝わって、そのピアノの音が今でも聴こえているようだ。(鷹太郎)

悴かみて認む手術承諾書 香川 三宅久美子

大病を患っておられる気持ちが確と滲み出ている句である。

手術をしなければならぬほどの病気ではあるが、出来ることなら手術などしたくはない。されどしなければ生命にも差し障りがある。やむを得ず、恐るおそる悼んだ手で手術の承諾書にサインせねばならない、不安げな作者なのである。悴かんでいたのは手だけではなく、総身が悴かんでいたことであろう。(紀元)

御家族が手術をする時、その近親者は手術承諾書を書く事が決まりとなっているようである。筆者も目の手術の時に家内が承諾

書を書いたが、重い病気であると、何か心に感じるものがあるだろう。季題が心に響いてくる。(鷹太郎)

へそくりをそつと剥がして古曆 大阪 酒井湧水

古曆にへそくりを張り付けていたのを思い出して、誰かに見られない内に剥がしているのが、おかしくもあり、ほっこりともする。

古曆を処分する前に思い出して良かった、良かったと安堵。新しい曆に貼替えようか、それとも今度はもう少し安全な隠し場所にしようか等と迷っているのかもしれない。(雅)

十二月になるとカレンダーを新しく掛け替える。それまで一年間使われていたカレンダーは壁から降ろされるが、何とそのカレンダーの裏にはへそくりが隠されていたのである。何とも愉快な季題の姿が展開される。(鷹太郎)